

## 地域福祉を支える高齢者

### <ポイント>

- ・様々な経験や興味にあわせて参画できるスタイルが、多くの高齢者の参加を促し、生きがいを創り出す仕掛けになっている。
- ・都市部の男性の経験や知識が活動を支えている。

### <高齢者が担う役割>

茨城県水戸市で、高齢者への弁当の宅配サービスを中心に活動を展開しているNPO法人ゆりの会には、様々な形で高齢者が参画している。毎週火曜日に弁当箱の消毒や食材の購入が行われ、翌水曜日には、100食を越える弁当がつくられ、会員の高齢者宅に届けられる。

「年をとって時間もとれるようになった」と火曜日だけに参加する女性もいる。「何か役にたつことがしたいと思って」と参加の動機を語る女性は、煮物などの腕を調理に活かしている。自家用車を使って宅配を受け持つ高齢者のなかには、かつて弁当を受け取る側だった人もいる。

かつて、市内の一地域で、3名の仲間での福祉ボランティア活動（食事会や入浴介助等）を展開することからはじめの一步を踏み出した同会は、寄せられる期待の高さから、弁当の宅配サービスに取り組んだり、その対象者や地域を拡大させるなど、活動の幅を広げてきた。また、そのことから生じた必要性からNPO法人格を取得するなど運営形態も高度化させてきた。こうしたことを支えてきた大きな柱のひとつが、多様な形で参画し生きがいを獲得している高齢者の力であったことに注目したい。

### <獲得される生きがい>

最後に、会に参画している高齢者がどのように生きがいを獲得しているかを見てみよう。

会に参加して3年になるという上本さんは、6年ほど前に定年した後の生きがいづくりの一環だった、とそのきっかけを語る。上本さんは、水泳などの趣味も楽しんでいるが、ゆりの会の活動は「ひと味違う」という。「民間会社で長くやっている間に商売でありがとうとは何度も言われた」が、お年寄りの「ありがとう」とは違う。心底から言ってくれるお年寄りの言葉に「自分の心が洗われる」という上本さんは、「お年寄りから力をもらっている感じ」とゆりの会での活動を振り返る。また、出会うお年寄りの姿は「やがて自分も通る道」、「反面教師みたいな方も時にはいるが」と笑いながら、上本さんは、ゆりの会での活動が、これらの自分の生き方につながる学びという側面を持っていることを教えてくれた。

理事として活躍する小坏さんは、行政で働いていた経験を活かし、ゆりの会の運営を支

えている。ゆりの会がNPO法人格を取得した時にも、事務局を担った。小坏さんは、地元の人たち中心で運営していた当時のゆりの会を、「外部の人間が入っていくのもなんだから」と、外側からお手伝いをしていたという。地元のメンバーの理事が抜けたことをきっかけに、本格的にゆりの会に参加した小坏さんは、現在、助成金の管理から賃借対照表の作成、行政との対応まで、事務局仕事を担っている。

調理に腕をふるう増淵さんは、ゆりの会に参加して7年ほどだという。預かっていた孫が幼稚園に入って「手が空いて」「何かできることはないか」とやることを探しているときに、ゆりの会と出会ったという。長年培った家庭料理の腕を活かして、「手に覚えた」感覚で調理の責任者としての役割を担う増淵さんだが、100食を越える分量の料理は「家のものとは違う」ため、「挑戦の部分が少なくない」と笑う。

家族の理解がないとできない、との増淵さんの言葉を受けて、「ご主人が奥さんが一生懸命やっているのを理解してくれている」という山本さんは、「ここに来るのが楽しい」と10年を越える年月に渡ってゆりの会の活動に参加している。山本さんは、「陶芸もやっていて忙しい」のだが、「ここに来るといろんな情報交換もできるし」「ハリが出る」と会の活動を大事にしている。